

# 科学と哲学における因果的推論

会場健大（北海道大学）

因果について問うときに、科学の視点と科学哲学の視点は（他の科学的概念においてもそうであるように）大きく異なっている。科学における因果論は、何を因果とみなすべきか、という問題意識である。一方、科学哲学における因果論は、因果とは何であるとみなすべきか、というものである。哲学における因果論は、因果概念の厳密な分析を求め、統一的な定義を決定しようという試みとして議論されてきた。それに対して、科学における因果論はわれわれが世界に対して何らかの変化を与えることを目的として、定義的な不完全には目をつぶりながらもさしあたっての因果的判断をくだし、行動の指針を与えるものとして技術的に開発されてきた。したがって、哲学者の仕事と科学者の仕事の間には大きな隔たりがあり、少なくとも科学者にとって哲学者の仕事は参照されないような状況が長らく続いてきた。しかし、この状況は果たして健全な状況なのだろうか。本発表では、科学と哲学における因果論を整理し、それらがどのような点で隔たっており、どのような点で関係しているかを概観する。たとえば、哲学の領域では決定論的な因果を重要視する議論が長らく議論の大部分を占めていた一方で、科学の領域では早くから確率的、統計的な手法が導入され、非決定論的な想定のもとで推論が行われてきた。そうしたこともあって、因果の一元的な説明を求める議論は科学の世界では考慮されておらず、ある場合には因果的定式化がなされない推論も行われ、因果的言及をしなければならぬ状況においては、もっぱら複数の観点ないし手法を用いて総合的に判断されている。本来、このように科学の現場において枠組みのあいまいになっている部分にこそ科学哲学の仕事があるのではないか。社会科学者の論争において哲学が果たした役割も参照しながら、哲学者がいま改めて科学に対して果たせる役割について検討する。